

留学・研究計画書

氏名 島田 めぐみ	留学機関名 Gandhigram Rural Institute
留学先国名 インド	留学期間 西暦 2007 年 11 月 ~ 2008 年 10 月
研究テーマ 南インド農村における社会関係の変容—マイクロファイナンス活動を事例として—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究のテーマはマイクロファイナンスグループ（以下 MFG）が村落共同体における社会関係に与える影響を明らかにすることである。これまでの MFG の研究には、マイクロファイナンス（以下 MF）活動の成功要因を明らかにする MF 理論のための研究が多い。本研究では狭い意味での MF 研究ではなく、MF を事例とした農村社会変容の研究を行う。</p> <p>学問的意義としては、ソーシャルキャピタル（以下 SC）論や住民組織研究への貢献が考えられる。SC 論については SC の範囲に焦点を絞る。Woolcock は「グループ内の結束を強化させる働きをするもの」と「グループ外の他の集団や政府などのフォーマルな制度・組織との連携を強める役割を果たすもの」と二種類の SC があることを指摘した（“Social Capital and Economic Development: Toward a theoretical Synthesis and Policy Framework”, <i>Theory and Society</i>, vol. 27:151-208）。Narayan はこれを受けて、前者を「結合型（Bonding）」SC、後者を「接合型（Bridging）」SC として分類し、両 SC はトレードオフの関係にあると論じた（<i>Bonds and Bridges: Social Capital and Poverty</i>, World Bank）。本研究はこの議論に対する二つの疑問：①両 SC は常にトレードオフの関係にあるのか、②接合型 SC はどのように蓄積されるのか、を明らかにするものである。住民組織の研究については組織化と排除という問題に的を絞る。MFG のように村落共同体内の社会的弱者だけを対象とするような組織作りを目指す場合は、そうした住民組織の存在が村落共同体の規範に反することがある。バングラデシュ農村の MF を分析した村山は、①ターゲット・アプローチによる開発は村落共同体の有力者を避け、貧困層に直接恩恵を届けるというものである以上、既存の村落共同体の秩序維持に対して逆方向のアプローチである、②MFG の活動は組織としてではなく個人ベースで行われるものであり、個人の利益を包括するような社会開発という側面が乏しく、協力のための制度は配分獲得競争の場と化してしまった、と論じている（「開発におけるコミュニティと住民組織化」『援助と住民組織化』アジア経済研究所）。本研究ではこの問題提起を受け、①MFG から排除された人々と MFG の関係はどのようなものか、②MFG は個人的利益追求の場に過ぎないのか、という 2 点を南インド農村のケースで明らかにする。社会的意義としては農村開発への貢献が考えられる。インド政府および NGO は、MFG を村落共同体に向けた様々な政府のスキームや NGO のプロジェクトの受け皿として機能させることを目標の一つとしている。こうした試みの成否は、MFG とその他の村落共同体メンバーとの関係によって影響を受けることが考えられる。従って MFG が農村社会に与える影響を明らかにすることで農村開発を計画する際に考慮されるべき重要な情報を提供することができる。</p>	

成果報告書

記入日 2009年

5月7日

氏名 島田めぐみ	留学先国名 インド	所属機関 Gandhigram Rural University
研究テーマ：南インド農村における社会関係の変容－マイクロファイナンス活動を事例として－		
留学期間：2007年11月～2009年4月		
<p><はじめに></p> <p>筆者は、2007年11月から2009年4月上旬にかけ、南インド Tamil Nadu 州にある Gandhigram Rural University に滞在し、調査研究活動に従事した。本研究の目的は、マイクロファイナンスグループ（以下、MFG）の活動がグループメンバーの社会関係資本（行為によってアクセス・動員される社会構造に埋め込まれた資源）にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることであった。</p> <p>調査の結果、①マイクロファイナンス活動は、メンバーのネットワークを村落内外で拡大させ（社会関係資本の増加）、メンバーはそのネットワークを利用して彼女たちの福祉を向上させていること、②MFG の組織としての特徴は、ミックス・カーストのグループと、シングル・カーストのグループによって大きく異なるということが明らかになった。なお筆者は本調査の結果を踏まえ、今後も同調査地において定点観測を続けていく意向であり、本報告書で述べられる研究成果は更なる研究の出発点となるものである。</p> <p><研究活動の流れ></p> <p>当初の研究目的は、MFG が村落共同体における社会関係にどのような影響を与えるのかを明らかにすることであった。だが、受け入れ機関である Gandhigram Rural Institute の指導教授と話し合いを重ねるうちに、「これまで多くのマイクロファイナンス研究で『MFG への参加が社会関係資本の増加要因である』という主張がなされてはきたがそれを証明した研究は少ない」という点に興味を持つようになった。そのため、研究の目的を「MFG メンバーの社会関係資本増加要因を明らかにする」というものに変更した。</p> <p>上述の研究目的を達成するためには通常、MFG メンバーと非メンバーの比較を行う必要がある。ところが、調査村では、未婚者および高齢者以外ほぼ全ての女性が MFG メンバーであるという状況で、MFG のメンバーシップ以外を全てコントロールした「メンバー集団」と「非メンバー集団」をつくるのが事実上不可能であった。そこで、MFG メンバーシップの有無ではなく、MFG への参加年数を説明変数とすることにした。</p> <p>実際の調査では、まず世界銀行が社会関係資本を測定するために開発した調査票を現地の事情に合うように微調整し、計 300 人のメンバーに質問票調査を行った。続いて、MFG への参加年数、MFG 活動への参加度とメンバー個人の社会関係資本量の連関を見るために SPSS を用いてクロス表分析を行った。その後、分析結果の考察を深めるために約 40 名のメンバー及び 3 名の NGO(Non Governmental Organization：非政府組織)関係者に聞き取り調査を行った。最後に、研究成果をまとめた報告書を指導教授と調査に協力してくれた NGO に提出した。</p> <p><研究成果></p> <p>1. 社会関係資本増加の要因</p> <p>世界銀行が作成した調査票によると、社会関係資本は①ネットワークと組織、②信頼と連帯意識、③集合行為と協調、④情報とコミュニケーション、⑤社会的結束、⑥エンパワーメントと政治的行為の 6 つの構成要素からなる。このうち、MFG への参加年数と有意な正の連関が見られたものは、①のネットワーク及び組織、③の集合行為と協調、⑥のエンパワーメントと政治的行為であった。また MFG 活動への参加度と有意な正の連関が見られたものは②の信頼と連帯意識、⑤の社会的結束、であった。④の情報とコミュニケーションは、MFG 活動とは連関がなく、かわりに、世帯収入および教育年数と有意な正の連関があった。</p>		

1.1 ネットワークと組織

この項目では社会関係資本量の指標として、個人の属する組織の数などを尋ねる。MFG 参加年数と MFG 以外の組織への参加有無との間には連関があった。特に Construction Worker's Committee という一種の組合への参加が目立った。これは、MFG を組織する NGO がメンバーに同組織への加入を勧めているためである。同組織に加入すると子供の学資や娘の結婚費用などへの資金援助が受けられるという。またインタビューから、MFG への参加はメンバーの知人・友人関係を拡大させることも明らかになった。その関係のなかには研修先で知り合った他村の MFG メンバー、NGO および銀行のスタッフとの関係といった村落外のつながりもあれば、村の中の自分の居住区以外に住む人とのつながりという村落内のものもある。これらのつながりによって、メンバーは『外の世界』(村の外、家の外)を知ることができるようになった」という。

1.2 信頼と連帯意識

同項目では、様々な関係にある人々への信頼の度合いなどが、社会関係資本量の指標として尋ねられる。MFG 活動への参加度とメンバー間の信頼には、有意な正の連関が見られた。活動によく参加するメンバーほど、他のメンバーを信頼している、あるいは他のメンバーを信頼している人ほど、活動によく参加する、ということである。一方、MFG 参加年数とメンバー間の信頼とには負の連関が見られた。参加年数が 10 年を超えるメンバーの、他のメンバーへの信頼は減少傾向にある。これは参加年数が長くなるとその分だけグループ内の問題も多くなるためではないだろうか。例えば、ある古いグループでは、活動開始から間もなく、リーダーが共同投資で事業を始めようと提案したが一部のメンバーしか参加しなかった。その後、同じグループ内であっても、この事業に参加したメンバーと不参加のメンバーの間では様々な意見の相違が見られた。筆者の調査中も、事業不参加のメンバーは「リーダーは身勝手だ。このグループはもう解散する。」などと話してくれたが、逆にリーダーは「メンバーが自分の意見を聞いてくれないので大変だ。」とぼやいていた。

1.3 集合行為と協調

この項目では、自分の所属する組織が村のために行った集合行為への参加有無、参加回数などを社会関係資本量の指標として尋ねる。自分の村のための活動への参加有無と MFG 参加年数には正の連関がある。メンバーには「私たちの村をよくしたい」という意識があるのだが、MFG 活動を始めて間もない頃は、貯蓄や融資の活動に精一杯であり、村全体のことを考える余裕はない。貯蓄や融資に慣れてくると、NGO からの動機付けもあり、村の清掃活動、寺院への寄付、村落会議での意見陳述、といった集合行為に参加するようになる。

世帯収入と村のための活動参加有無には負の連があることも興味深い。つまり、世帯収入が多いメンバーほど村のための活動に参加しない傾向があるということだ。理由としては、世帯収入が高いメンバーは家で小さな雑貨店などのビジネスを営んでいることが多く、村のための活動に参加している時間的ゆとりがない、ということが考えられる。そうすると、MFG 活動を通じてビジネスなどを始めるメンバーが増えた場合、村のための活動に参加するメンバーの数は減っていくのかもしれない。この点は「MFG への参加が社会関係資本増加の誘因である」という見解に疑問を投げかけるものである。

1.4 情報とコミュニケーション

この項目では、携帯電話の所有状況、テレビ、ラジオの視聴、頻度、新聞の購読頻度などを尋ねる。教育年数が長いほど、あるいは世帯収入が多いほど、携帯電話を所有している割合は増加した。また教育年数と新聞購読頻度との間には強い正の連関が見られた。なお、この項目には MFG 活動の影響はあまり見られなかった。

1.5 社会的結束

同項目では、村落内部における「安心感」や、先月、様々な背景の人々と食事を共にする機会の有無などを尋ねる。MFG 参加年数と、異なる社会・経済的ステータスの人々と食事を共にする機会の有無との間には連関が見られる。MFG への参加年数が長いほどそのような機会も増えるようである。ちなみに、この質問への回答は調査を行う月によって影響を受けてしまうため、注意が必要である。調査地では結婚式を行える月と行えない月があり、データ収集期間が長期にわたった場合、結婚式の月にこの質問をされた者は、結婚式を行えない月に同じ質問を受けた者より共食の機会が多くなってしまふのである。データ収集期間を「結婚式シーズン」あるいは「非結婚式シーズン」のどちらかに限るといった工夫をする必要があるのではないだろうか。

1.6 エンパワーメントと政治的行為

この項目では、村落議会への出席やデモ行進への参加有無などを尋ねる。村落議会への参加有無と MFG 参加年数との間には連関がみられた。すなわち MFG 参加年数が長いメンバーほど村落議会に参加する割合が高いということだ。メンバーは村落議会に参加することで、これまで知らなかった政府の福祉政策などの情報を得られるという。また、村のインフラ整備を村落会議で要求したグループもあった。しかし、「(村落会議では)話を聞いて、振る舞われるチャイ(ミルクと砂糖をたっぷり加えた紅茶)とワダ(スパイシーなドーナツ状の軽食)を食べるだけ」というメンバーも少なくない。参加の有無だけではなく、「参加」の意味を確認することが大切なのではないだろうか。

このように、MFG への参加年数および活動への参加度合いは、様々な社会関係資本の指標と関連しており、MFG 活動がメンバーの社会関係資本に影響を及ぼしていることが明らかになった。特に、MFG 活動はネットワークと組織、集合行為と協調の側面で、メンバーの社会関係資本を増加させると思われる。更に、メンバーが MFG のメンバーシップ及び活動によって得たネットワークは彼女たちの福祉向上に役立てられているようだ。もっとも、この見解は 15 分程度の短いインタビューに拠るもので仮説の域を出ない。従って社会関係資本と福祉向上の関連をひとつの発見として主張するためには、社会関係資本と福祉向上の関連を証明するための量的データ、そして、社会関係資本が福祉向上にどのように役立っているのか、そのメカニズムを解明するケーススタディなどの質的データが必要であろう。

また、MFG 参加年数とメンバー間の信頼との間に見られた負の関連は「MFG への参加が社会関係資本の増加要因である」とであるという通説に疑問を投げかけるものである。今回の調査では研究目的を「MFG メンバーの社会関係資本増加要因を明らかにする」と設定したため、MFG メンバーの社会関係資本を損なう要因については十分なデータはない。だが、当初の研究目的である「MFG が村落共同体における社会関係にどのような影響を与えるのか」というより広い問題意識に立ち返るとすれば、10 年以上続く MFG ではメンバー間の信頼が減少する、という現象は非常に興味深いものである。今後の課題として、MFG メンバーの社会関係資本を損なう状況の分析を挙げておきたい。

2. 社会関係資本の質的相違

調査地の MFG は、構成員の相違によって二つに分類することができる。一つは、同じカーストに属する人々が集まるシングル・カーストグループ、もう一つは、異なるカーストに属する人が集まるミックス・カーストグループである。今回の調査を通して、二つの MFG はそれぞれ異なるタイプの社会関係資本を有していることが観察された。シングル・カーストグループではメンバーが村落内に住む親族の集まりとなることが多々ある。すなわち、シングル・カーストグループのメンバーが持つグループ内部の社会関係資本は親族ネットワークに由来する「古い」ものである。一方、ミックス・カーストグループのメンバーが持つグループ内部の社会関係資本は、MFG のメンバーシップに因る「新しい」ものである。ミックス・カーストグループは MFG 参加以前には「そこまで親しくなかった」、「話したことはなかった」という人々の集まりなのである。

では、こうした社会関係資本の相違は MFG 活動にどのような影響を及ぼしているのだろうか。メンバーに、シングル・カーストグループとミックス・カーストグループのどちらが好ましいかと尋ねた結果、ミックス・カーストグループを好むメンバーが多いことがわかった。その理由は以下の通りである。

まず、シングル・グループでは返済が滞ることが多い。それは、メンバーが「みんな親戚なので」誰かの返済が遅れたときに強く追求することができないためであるという。次に、シングル・グループでは、リーダーの言うことをメンバーが聞き入れてくれないことがあるという。例えば、銀行からの融資をグループ内の誰に貸し付けるのかを決める際、リーダーが決定した後も、「(同じ家族なのに) 何故、彼女に融資して私に融資しないのか。」という文句から言い争いがおこることがある。

一方、ミックス・カーストグループでは、異なる背景を持つメンバーが公平に活動できるよう、確固たるグループ規則ができ、返済が遅れた場合はその規則に則って然るべき対応がとられる。また、融資を受けるメンバーを決定する際にも、リーダーは私情を抜きにして誰もが公平とみなす基準（融資を受けた回数、貯蓄金額など）に即して決定することができ、メンバーからの文句もないという。

このように、シングル・カーストグループの親族ネットワークに由来する「古い」社会関係資本は MFG にその「古さ」からなる「馴れ合い」を生み、MFG 活動には必ずしもよくない影響を及ぼすことがあるため、メンバーは、しがらみのない「新しい」社会関係資本を持つことのできるミックス・カーストグループを好むのである。

ちなみに、二つの MFG の相違を社会関係資本増加の説明変数としてクロス分析を行ったが、有意な関連は見られなかった。このため、本報告書では、量的データの分析からは見えてこないが、何らかの相違があるという意味を込めて「社会関係資本の質的相違」という表現にとどめた。二つの MFG には異なる社会関係資本があり、その相違が MFG 活動に影響を与えるという主張をより明確に具体的に示すためには更なる調査が必要であろう。

<おわりに - 留学生生活を振り返って>

筆者の留学生活は多くの人々との関係によって成り立ったものである。第一に、松下国際財団、Gandhigram Rural Institute とのつながりは、調査という目的を達成するためにはなくてはならないものであった。この場を借りて改めて感謝させていただきたい。

留学中に会ったインドの友人たちとの関係も、不慣れな状況で研究を進めていくにあたって大きな支えとなった。インドでは「誰々の知人である」という社会関係資本が役所や銀行などで手続きをスムーズに進めるために非常に役立つことがあった。日常生活においても、美味しくて（衛生上）安全なレストランや、腕のいい医者、（インドの田舎では少ない）トイレトペーパーを置いている店などは友人を通じて知ることができた。とはいえ、友人との関係はそれが何の利益につながらなくとも、それが「ある」というだけで有り難いものだ。午前 11 時と午後 4 時のティータイムに食堂でコーヒーを飲みつつ、冗談から将来の夢まで、本当に色々なことを語り合った時間は忘れないだろう。

そして、被調査者の MFG メンバーとの関係がある。彼女たちとの関係は、始めこそ情報の収集者と提供者というものであったが、調査を進めるうちに、理解し合い気遣い合う友情関係に発展した。

調査を開始してから間もない頃、筆者は、現地の言葉も話せず、調査者としての最低限の礼儀を示しつつも質問票に回答を書き込む調査補助者の手元を覗き込むばかりであった。その後、調査が進むにつれて言葉にも慣れ、被調査者の飛ばすジョークに笑ったりする余裕が出てきた。そうすると、「言葉がわかるようになったのね」と声をかけられることが多くなった。一度、自分たちの言葉が通じると認識すると、彼女たちは実に多くの「おしゃべり」をしてくれた。その中には、親戚にだまされたこと、離婚のこと、など深刻な話題もあり、返答に窮することもあった。だが、そのような内容を話してくれるということは彼女たちが私に心を開いてくれている証だと感じ、彼女たちのことをもっと理解したいと強く思うようになった。彼女たちは、私のことを気遣ってもらった。ある日、メンバーの一人に録音テープを使ってインタビューをしていたときのことだ。彼女は普段、早口で威勢良くしゃべる人なのだが、その時はいつもと違い、ゆっくりと低い声で話していた。こちらは心配になって「具合でも悪いのか」と聞いたところ、「録音しているからこういうふうにししゃべったほうがいいと思って…」と答えたのである。ここまで私（と私の調査）のことを考えてくれているとは思わなかったため、正直を言って非常に驚いた。彼女たちとこのような関係を築くことができたことを誇りに思う。今後この関係を大切に、彼女たちと彼女たちを取り巻く社会の変化を理解していきたい。

写真1：調査初日。メンバーは仕事の手を休めて集まってくれた。



写真2：調査最終段階。仕事が休みの日に村を訪れ、メンバーの家の前で話し合い。



写真3：タミル・ナドゥ州の収穫祭「ポンガル」の日に。
太陽に感謝を捧げお供え物（甘いお粥、バナナ、ココナツ）をする友人の家族と。

